

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第4回 EMPIRE エンパイア

アメリカのニューヨークに本拠地があったメーカーで、もともとは軍需用の精密機器メーカーとして最高レベルの技術を持っていた会社。戦後になってその優れた技術をベースにオーディオに最も重要といわれる入り口（カートリッジ、プレーヤー）と出口（スピーカー）にこだわって高い技術と独創的なアイデアで完成度の高いハイエンドの製品を70年代後半まで生み出していた。日本ではカートリッジとプレーヤーが有名だが、60年代に入ってから発表されたスピーカーは当時その音の完成度の高さとデザインの美しさで全米で絶賛された。

本文 / 田中伊佐資

キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 田代法生

Model-9000M

60年代中頃に発表された当社の最高級システム。大理石天板付の美しいフォルムに大型のアルニコマグネットを使った3ウェイシステムで、キャビネットも定在波を最小限に軽減するために7面体構造を採用。音質はメインシステムとしても十分な能力を持っている。明瞭かつ滑らかで厚みのある中音域と巨大なアルニコマグネットで駆動される40cmウーファーによって、外観からは想像以上のスケールの大きい音で、オーケストラの再生音などは聴き手を包み込んで魅了してしまう。これぞ良質な音とデザインを兼ね備えるオーディオ史に輝くシステムといえそう。一聴の価値あり。市場価格は75万～85万円ペア



Model-8000M/8000P

上級機の9000Mと同じウイーター、ミッドレンジユニットとスタイリッシュなボディに大型のマグネットを使った33cmのウーファーを搭載。初期型の8000M(写真左)は無垢のマホガニー材が贅沢に使われ、その繊細なデザインは目を見張る物がある。後期型の8000P(写真右)はよりシンプルでモダンなデザインになっている。これらの中高域ユニットはアメリカ東海岸の高級スピーカーメーカーがよく使うフェニックス製のダイヤフラムを持ち、きめ細かく滑らかでツヤのある音質を形成。近距離で聴いても刺激音はなくクリアでツヤのある再生音はとても自然に音楽を聴かせてくれる。反応が速く、良くは最低音は巨大なマグネットで駆動される33cmウーファーはジャズ系ソースやスピード感あるポップスに特に良くマッチしてくれる。これらのシステムは大型のスピーカーの横に置いてさらっと音楽を流していると、あたかも隣的大型スピーカーが鳴っているような錯覚をしまうほど。市場価格は50万～60万円ペア



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

EMPIRE

エンパイア

Model-598

同社としては2世代目のプレーヤーシステムで、この前に398、そしてこの後に698というシステムが発表された。598は398と本体はほとんど同じ設計だが、専用のアクリルカバーが追加されている。698になってアームが新設計になりカートリッジの交換がより容易になり、電子制御のアームリフト、回転アジャスターが搭載された。いずれも回転方式はベルトドライブを採用。そして当時としては画期的なTROUBADORと名付けられた振動吸収システムがターンテーブル本体に組み込まれており、徹底的に振動吸収にこだわった設計は当時から高い評価をされていた。出てくる音もとても明るく伸びやかな音場感が魅力的。オリジナルは米国仕様の60Hzになっており、50Hz地域で使用の場合は専用のプーラーが必要となる。市場価格は20万～25万円



エンパイア スピーカーの内部

キャビネットに下向きに取り付けられたウーファーは音の歪みを最小限に抑えるため、ユニットのフレームはエンクロージャーと大理石天板の重量も利用して押さえ込まれるように設計されており、ウーファーの音のぶれが感じられない。さらに、360度方向に放出される低音はセッティングの場所を自由に選びやすい。また大型のアルニコマグネットを持つウイーター(3cm)とミッドレンジ(12cm)のユニットも硬性の高いアルミダイキャスト製のフレームにそれぞれ4本のボルトで挟み込むように固定され、キャビネットの構造も9000Mは平行面のない7面体、8000Mは円形構造になっており、そのクリアで歪みの少ない音場再生を可能にしている。



カートリッジ

999E/X(写真左)は初期型のシリーズの中心となるカートリッジで、明るく明快でツヤのある中高域と腰の強い弾むような低音は今でも高い支持を得ている。2000Z(写真中央)は70年代に入ってから発表されたシリーズで、より粒立ちが良くなり、同社の特徴である明るく明快な音に一段とメリハリがついた音質。4000D/1(写真右)は後期型のシリーズD/1、D/2、D/3の3タイプある中のスタンダードモデルで、よりワイドレンジになり新しい録音技術に対応しやすくなっている。市場価格は2万～3万円

アトリエ Je-tee に入るやいなや、いやあ暑いすねえというような挨拶もそこそこに、店主の岡田圭司さんはLPに針を落とす。クインシー・ジョーリンズの『ザ・ベース・オブ・ア・バンド』だ。「これが4000番。Dの1です」1曲終わり、岡田さんはカートリッジを手際よく付け替え、同じ曲をかけた。「こつちが999です」。私はエンパイアといえばカートリッジぐらいのことは知っている。だがそれ以上のことは真っ暗。こういう聴き比べは初めてだった。最初の4000番はモダンな音。この秋の新製品と言われれば完全に信じた。ビッグバンドのメンバーを詰め込んだスタジオの広さが出ている。全体の歯切れがいい。次の999は、サクスの甘いトーンがたまらない。ソロの音色を味わうならこつち。クインシーのビッグバンドは50年前の録音。製造時期にびびり合っている。これでポーカーにしばらくしてみたいと切に願い、岡田さんにリクエストした。キング・コールがかかった。ジョージ・シアリングとのキャピトル盤。同店のテーマソングといってもいい。しばしばかかる。だが、いつもと違って今回はアナログ。ウエットで色艶のある声を聴いてしまった。聴いてしまったとしか言いよ

部屋のド真ん中だろうと置きたいと思わせる説得力

うがない。もはや次に進めないほどいい。プレーヤーはガラードの301だった。目の前にあるエンパイアのプレーヤーで聴きたかったけれど、まだ米国仕様のままで、50Hzのプリー入荷待ちのため聴けなかった。でも明るい音調のジェンセン4ウェイとオール・エンパイア勢と掛け合わせると白っぽくなりすぎるらしい。ガラードで落ち着かせるぐらいがちょうどいいようだ。オーディオが組み合わせ次第でおもしろくなるのは往年も近年もない。ソファーでくつろいでいたら、両脇にほんと置いてある8000Mからダイアナ・クラールが流れてきて、思わず立ち上がってしまった。声の細かなニュアンスが伝わってくる。ミッドレンジがすごい。スコーカーは、振動板もアルニコもあ。そのための低い声色も瘦せていない。あまりにもスピーカー離れしたデザイン、あまりにも豪華な家具調仕上げのため、音は二の次と思われがちだがとんでもない。底面下向きのウーファーもきつちりベースを刻んでいる。それにしても、リビングルーム用途のスピーカーは各社揃ってスリム化を追求しているようだが、この堂々としたエンパイアこそリビングにセットするのがふさわしい気がする。部屋のド真ん中だろうと置きたいと思わせる説得力がある。